

## Dr.D.メルツァーとの邂逅

ヤマガミ精神分析クリニック 山上千鶴子

Dr.メルツァーに思いを馳せるとき、必ずや幼かりし頃の或る記憶が呼び覚まされる。生活綴り方の時間に私が書いた「石ころ」と題された一篇の詩。「わたしは石ころを蹴る・・石ころはころころと転がる・・」。うろ覚えだが、確か最初の出だしはそんなふうな詩だった。当時私は霞ヶ浦を彼方に見下ろす、開墾された麦畑の連なる丘を越えて、かなりの行程を赤い鞆を背負いながらとてくと歩いて阿見小学校に通っていた。そして或るとき、ふいと路傍の石ころに眼を据えた。それはそこに在った、動かずに(勿論!)。それから私の靴がそれを軽く蹴った。すると、ころころと転がってゆき、新たな居場所を得て再び静止した。しかしそれはもはや元のままでは決して有り得ない。突如、なぜにか痺れるような感覚に憑かれて、呆として立ち竦んだ。「私は在る」とは何か? それはここか、それともどこなのかと己に問うた私がいる。それ以来、そうしたわけのわからぬ煩悶と焦躁に付き纏われ、私はいつか己自身を遠く蹴らねばならぬものとの想いを心の深奥に抱えた。でも何処へなのか?

Dr.メルツァー(Donald Meltzer)は1950年代前半にアメリカから跳んだ。まっすぐに己の真摯な志の赴くままに、メラニー・クライン(Melanie Klein)の許へと狙いを定めて……。そして私は1970年代前半に、心の内に疼く焦慮に駆られて、ただ闇雲にイギリスへと跳んだ。それからまるで石ころがころころと転がるようにあちこちして、その果てに気が付けば私は「タヴィストック」に居た。かくしてメルツァーと私はロンドンで出逢うことになる。そして図らずも、いかような思惑も了簡をも超えて、私はメラニー・クラインの系譜に列なる直系の‘弟子’の一人になるべく運命づけられてゆく。

そもそもはMrs.マーサ・ハリス(Martha Harris)との出逢いに始まる。当初は彼女がDr.メルツァーの妻であるなど知る由もなかったのだが。タヴ

イストック・クリニックを訪れた際、彼女は些かの逡巡がなくもなかったであろうに、私をfull-time traineeとして受け入れてくださった。その後しばらくして、彼女の推挙に拠り、セント・ジョージ病院の児童精神科外来で Mr. ブレンナー(John Bremner)の指導の下に(正しくいうならば‘庇護’の下で) child-therapist trainee として働くこととなり、さらにはMiss. ウエデル(Doreen Weddell)とのパーソナル・アナリシスも始まり、ごく自然な成り行きでDr.メルツアーのプライベート・スーパーヴィジョンをお願いするに至った。そのようにして私はいつしか、彼らすなわちメルツアー率いる分析家グループの緊密な結びつきの中にかっちり取り込まれていた。当時の私とは云えば、ひたむきに臨床三昧の日々を邁進しており、まさに意気軒昂そのものであった。

Dr.メルツアーは、1970年代の後半、その当時のイギリスの精神分析家の養成システムや資格認定制度に反撥し、思い切った改革の舵取りを目論んでおられて、周囲に少なからず波紋を投げ掛けていたらしい。ところが当時の私はまるで蚊帳の外に居た。Miss.ウエデルは、ロンドンの分析家たちの間で噂される思想的対立や感情的反目やらのゴシップに私が心惑わせられることをお喜びにならなかったし、生来的に私はそうしたことにまるで疎いのだったから、週5回の分析セッションに通いながら、ひたすら己の内なる事柄のあれこれ、つまりは心的現実に深く没頭していた。いつぞやDr.ビオン(W.R.Bion)がタヴィストックに招聘され講演をなさった際に、おもむろに彼が開口一番、「私はもうほとほとうんざりだ (I am sick and tired···)」とおっしゃって、精神分析の異なる流派間の軋轢に言及なさった折しも、何ら感興を催されることはなかった。私は敢えて‘埒外の人’としての自分の立場に甘んじていた。私はここイギリスに生涯留まるわけではない、日本に戻らねばならない。それからの私は、何処へ行こうとするのか？ それを見極める為、私は己の自由を徹底して守り抜こうとした。誰彼への恭順もしくは敵視など、一切無関心・無頓着を決めていた。それほどに私は若くもあり、一途でかつ頑なであった。

Miss.D.ウエデルは、セッション中に私が語る夢について解釈する際、転移対象としてDr.メルツァーの名をよく引き合いに出すことがあり、私はもう辟易した。冷やかに思ったものだ。「ああ、彼女は彼をお好きでいらっしやるのだ・・・」と。彼女は私に手古擦<sup>てこず</sup>っていた。だからなのか、私を一つの症例としてメルツァーに報告することがある旨を、それとなくほのめかされた折りも、そんなことなど一向に私の関心を引くことはなかった。しかしながら、或る早朝、メルツァーとのセッションが彼の事情で遅れ、終了時刻が繰れ込んだ。その直後に予定していたMiss.ウエデルとの約束の時間に間に合いそうにないと知った彼は私をご自分の車に乗せ、彼女の自宅まで送り届けてくださったことがあった。さすがの私も、その折りは痛く恐縮したことを憶えている。

そこに青天の霹靂というか、或る椿事が持ち上がった。タヴィでの私の指導教官であったMrs.ラスティン(Margaret Rustin)のお取り計らいで、ようやく念願だった女の子の症例を手渡されたのだが、それは私の3番目に当たるトレーニングケースで、その個別指導についてもタヴィ圏外の或る著名な女性の分析家から応諾を取り付けた。それは一つの嬉しい出逢いになるはずであった。だがそうはならなかった。私が巡り会った症例ハンナは、ユダヤ系の7歳の女の子で、心の闇深い奈落に堕ちていた。それでも当初から、彼女の呻<sup>うめ</sup>きは微かに私にも漏れ聞こえていた。「Contact, please ! (応答願います! )」と執拗に、それは訴えていた。でも私は動けなかった。勿論ハンナも動かない。そして唯々うわっ滑りなスーパーヴィジョンに業を煮やして、スーパーヴァイザーの変更を決意した。そして又々石ころを蹴る私がいた。あちこちにぶつかりながらころころ転がって、拳句に廻れ右してメルツァーの懐にポンと駆け込んだ。何のことはない。当時すでに他の症例でお願いしていた彼とのセッションの時間にハンナの症例を持ち込んだというわけだ。しかしそれで一件落着ということでは済まなかった。私は何を選んだのか、そして何を選ばなかったのか？ それは何故だったのか？ 臍げにはロンドンの分析家グループ同士の‘裂け目’に私は嵌まったのだらうと、辛うじて状況判断は出来たけれども、それだけでは答えにならない。そもそも彼らに

とって‘自明の理’が私には頓と分かってはいないのだという疎外感に圧倒され、打ちひしがれた。何故にここに「私は在る」のかといった内なる懷疑を再燃させ、失意と混迷の中に私は居た。ハンナを重く抱えながら…。

そんな折りに、メルツァーが或る日、さりげなしに私にこんな話しをされた。「精神分析家の中でも、譬えていうならば、纏れた糸を一つずつ解きほぐすように謎解きをすることを分析と心得ている人達がいる。片やその一方では、草花を育てるように、光を当てたり、水を遣ったり、枯れた葉や花びらを摘み取ってやったり、時としては肥料をあげたりしながら育ててゆく。それを分析と心得る人達がいる。自分は後者だ…」と。察するに、おそらく当時の私の心挫かれたさまを気遣って敢えておっしゃってくださったのであろう。後々になって、それら二つの違いとは真に認識知即ちヘレニズムとヘブライズムもしくは論理的認識と審美的・芸術的認識の差異だと判ったが、無論その折りにはすぐさま彼の言葉が呑み込めた筈もない。だが己自身の建て直しの契機とはなった。

ようやくにしてハンナはメルツァーと私との三つ巴の関係の中にながら抱えられる。そして彼女は一つ‘奇跡’となった。声無きものが声を持ち、形無きものが形を持つ。わたしというものを持たない、その輪郭も目鼻立ちも無い、つまり何者でも無いもの(nobody)が、何者か(somebody)になった。暗闇の深淵の呻きでしかなかった子どもは、人間の魂をもつ光の子になった。それは紛うかたなく、セラピイという場が産みだしたものだ。だから私はそれを「セラピイの子ども」と呼ぶのだ。そしてハンナは、‘セラピイの子どもたち’の原型として、永遠に私の胸の裡に生き続ける。

さらには、もうひとつ重大な事柄が挙げられる。ハンナとの週5回のセラピイ・セッションの詳細な記録を書き綴り、メルツァーとの週1回のスーパーヴィジョンに通う。そこで彼から幾つかの指摘を受けては、再び彼女と出逢う場に戻ってゆく。そうした毎度毎度の繰り返し。実にこの往復(back-and-forth)によって、自ずから私のからだの中で某かの独特のセンサー(sensor:

感知器)が培われ、一つの顕著な心的姿勢が体得させられていったという点である。その当時タヴィでは、‘トイレット・ブレスト(toilet-breast:トイレ・オッパイ)’という言葉がよく用られており、それはセラピストの機能の核心部分かつ必須条件でもあることが取り沙汰されていた。それは心的苦痛(psychic pain)を排出することを専らとする心の装置なのだが、真にこうしたセラピイを巡る全体の‘場’の展開の中でしか感得し得ないものと言えよう。おそらく今やそれは、コンテナー(container:容器)というピオンの言葉に取って替わられているやも知れない。ニュー・バージョンなのは判るが、私にはそれがやや奇麗事に聞こえてしまう。実際に想像してみたい。泣き喚く赤児を腕に抱えて連日連夜、授乳やらおしめの替えやらに、髪振り乱して奮闘する親の姿を……。まさにセラピイとは、それなのだ。だから私はどちらかという、この‘トイレット・ブレスト’という言葉に今尚もこだわり続けている。たとえ分析の対象が成人の場合であったにしても、そこに大した違いは無い。

「精神分析」というものは本来、‘悲傷の魂’<sup>ひしやう</sup>にしか用の無いものであるのかも知れない。創始者フロイト(G.Freud)が実にそうなのだから。M.クライン、W.R.ピオン、そしてD.メルツァーすらも、それぞれの固有性においてだが、‘悲傷の魂’なのだと私は心密かに思う。そうであればこそ彼らは、「この指とまれー！」で精神分析に引き寄せられ、様々な葛藤を経ながらも頑として踏み止まり、やがて時の移ろいの中で‘贖い(atonement)の器’に変換(transform)されてゆく。誰の為よりもまずは己自身の癒し難い魂の救いのために……。そして今や我々の手元に遺された彼らの著述が、各々の心の苦闘の軌跡を証しているのではなかろうか。たとえいずれもが易々と理解されることを拒絶するような難解な意匠に包まれているとしても……。翻って彼らの「精神分析的知」が巷に伝播され市場価値を持つということに、些か際どいものを感じる。もしもそれが‘偶像崇拜’されるならば、逆説的に空しいもの・助けにならぬものとしていつしか放棄され 顧みられない宿命となるのではないかと懼れる。果して精神分析の‘衰退’に拮抗する力とは何なのだろうか。その一つとして、「精神分析」への信 (faith)

の力としての‘楽観’をここで挙げたい。

或るときメルツアーが私に語ったことがある。Mrs.クラインとの分析体験というのは、真に心弾む、まさに喜悦そのものであったと。何故にいつから「クライン派」というと、苛烈(harsh)なイメージが付き纏うようになったのかと嘆息される。そしておしまい「だから今は本当につまらない…」と憂鬱そうにおっしゃる。私にはとっさに返す言葉も見当たらず押し黙ったまま、でも密かに一瞬クスツと心の裏側で笑ったのを憶えている。ああ、彼はMrs.クラインの「分析の子ども」でいらした頃のご自分をこんなにも懐かしがっておいでなんだわ。もう充分に大成されておいでで、今や分析家グループを率いる、ご立派な旗頭の一人でいらっしゃるというのに……。私は胸の内でそう呟いていた。当時の私と云えば、「Girls Be Ambitious(乙女らよ、大志を抱け)！」の内なる檄げきの声にそこそこ煽られていた感があって、今ひとつ彼の‘郷愁’に共鳴を覚えるのは無理な話であった。だが、何故にか胸を衝かれた。そして、私の中の‘勇み足’がピタッと止んだ。「精神分析」というものがそんなにもいいものだという信(faith)が私には無いことに恥じ入った。Mrs.クラインの溢れんばかりの光のことばに照らされて、若きメルツアーの心傷つき萎えた、でも元来は健やかな魂とんぼが、まるで蜻蛉が羽化するように、徐々にメタモルフォーゼ(変貌)を遂げたのであろう。それが精神分析家メルツアーの原点なのだと思います。いつぞや私がタヴィストックを去る頃に、Mrs. M.ハリスが、あの柔和な面ざしに笑みを浮かべて、私にお尋ねになった。「日本に戻られたら、チズコはパイオニアにおなりなのね…」と。でも私はならなかった。実際にそうはなれるはずもなかった。クライン派の精神分析家としての私は、メラニー・クラインの勇猛果敢さともドナルド・メルツアーの楽観ともごくごく無縁なのだったから……。

私は帰国後の1980年、個人開業の拠点を東京・原宿に定めた。それ以来丸25年を経たが、今も尚動かずに居る。当初日本の児童臨床の実態は私の眼には惨憺たるものに映った。子どもらは親の‘無意識’くびきという軌につながれていた。言い換えれば、子どもと云うのは親の‘投影同一視’の

‘掃き溜’なのだ。子どもの心の病いが「親の因果が子に報い」というものなのだとしても、それも厄介至極なのだが、或る程度は致し方無しと許容もしよう。しかし、いざセラピストが子どもをセラピイの場に導入するに当たり実に障壁となるのは、「あなたはあなたでいいのだ」といった、真の意味で子どもの個としての自由を認める‘赦し’が親側に欠如していることなのである。そうであるから、セラピイの真っ只中であろうと、何かしら不都合を察知したら、親はさっさと我が子を引っ攫ってゆく。恐れ慄いた。まるっきり不毛の荒れ地に居た。セラピイが拠って立つところの地盤を踏み固めてゆこうとしても、何とも己の足場が危うい。ズブズブと底無し沼に嵌まってゆくような徒労感だけが募っていく。当時の学会などの症例発表から徐々に窺い知れたのは、お守り・子守りのセラピイもしくは沿い寝のセラピイが児童臨床であった。まずはそんなところが無難なのかと思いついて、早々に撤退した。つまりはそれ以来、私は子どもの分析治療を断念している。彼の地ロンドンで心優しきMr.J.ブレンナーは「日本の子どもたちのために…」とおっしゃって、どれほど多くの時間を私の指導のために割いてくださったことか。彼のご自宅で、彼ご自慢のみごとな庭園を眺めやりながら、くつろいで楽しげにパイプ煙草を煙らせながら、私のセラピイのケースに耳を傾けてくださった。あの老いしジョンの想いに、私は報いていない。そう思うと辛く心痛むものがあつたが、当時の状況では無理は無理なのだった。だから、クラインの勇猛果敢さやラメルツァーの樂觀などとてもない。唯々おっかなびつくりの暗中模索の日々であつたのだから……。

ところが実はその一方で、ごく僅かな方々だが、病院など他の心理臨床機関で児童臨床に携わる有志の方が、どなたも個別にだが、お越しになっていらっしゃる。幾つか日本の子どもたちのセラピイの症例に私は関わってきた。そして近年、目覚ましいことが起きている。それは何とも形容し難い一つの興奮なのである。続々と「セラピイの子どもたち」が育ってゆく。一人一人がしっかりとセラピイの場に根付いてゆく。そうした彼らの奮闘ぶりはホンモノで、つまりはフロイトのいうところの心の徹底操作(work-through)ということだが、私は目を瞠りながら子ども一人一人に心の裡で語り掛ける。「凄いじゃ

ないの。あなたはそんなにも自分を知ることができるのねえ。そんなふう<sup>に</sup>自分を導くこともできるのねえ……」と。日本の子どもたち、その幼い魂が憑かれたように獅子奮迅しかつ闇から光へと飛翔してゆくさまを目の当りにして深い感銘を、時としては畏敬の念すらも覚える。いつか思わず知らず、私は喝采する。「イギリスのセラピイの子どもたち」も素晴らしかったけど、「日本のセラピイの子どもたち」も素晴らしいじゃあないの！ 全然負けてないわ。それどころか、これほどのケースをタヴィストックで見たことも聞いたこともなかったわよ！」突如として私の愛国心は沸騰する。まるでオリンピックのメダル表彰台で日の丸の国旗を見上げるみたいに、ちょっぴり熱い涙をふいと目頭に浮かべる。彼の地で私に手渡されたものが、こうして此の地日本で誰彼に正しくも受け継がれている。それは途方もない安堵であり、かつ誉れでもあるのだから……。

私の臨床活動はと云えば、イギリスからの帰国を境目に、成人を対象にした分析治療へと程なくギアシフトした。私の滞英期間は、私の年齢で云うと、25歳から33歳の間になるのだが、日本でのかくも長き不在という事実は私の日本人としての言語感覚においてかなりの痛手というか剥奪でないわけではない。まずはその空隙を埋めることが急務となり、従って‘日本回帰’が至上命令となった。私は帰国当初の数カ月間「日本詩歌全集」を読み耽っていた。それから、目黒の「喜多能楽堂」にも繁々と通いづめ、謡曲の音調・響きに陶醉した。永年の餓え<sup>かつ</sup>が癒されるようで、フツと息を吹き返した。勿論それらは、英語から日本語へと思考回路を変換するという意味で私の助けになってくれたわけだが、同時に彼の地で私は随分と窮屈に生きていた、えらく不自由な私でもあったと改めて振り返らざるを得ない心境ともなった。だから孤独がむしろ有り難かった。がそうは言っても、現実には分析家としての私の眼前に切迫していた課題は、いかなる言語ならば、しかも日本語でだが、分析治療は成立し得るものかということであり、一人思案に暮れた。暗中模索の手探りの中で命綱となったのは、実にメルツァーの「分析の子ども」として培われた‘楽観’である。精神分析への信を、私は試されていた。とにもかくにも「分析の場」に‘座り’続けるしかない

思い及んで、それから丸25年の歳月を経た。かくして気が付けば私の傍らには、今や私が心の裡で密かに呼ぶところの「‘分析の子ども’同盟」の面々が健在である。

さて、人はその固有性において生きてこそ命の‘<sup>はな</sup>華’を咲かせられる。メルツアーの「精神分析」すなわち彼の言語(Psychoanalytic Language)とは徹頭徹尾、彼という人そのものではないか。もしそうだとすると、私は果してメルツアーの‘彼固有’とは何であるのかを断然知っていると云えるのかしら？否、永遠に‘否！’である。実際にはメルツアーについて個人的に知っていると言えと言えなくもない事柄が幾つかある。絵画がお好きらしいとか、旅行好きで、園芸好きで、それに大の生きもの好き……。それに、どうもユダヤ系アメリカ人ということらしいとか。それから、そう確か、メルツアーは色盲(color-blind)だとおっしゃってた。この色盲というのは、誰から聴いたわけでもなく、たまたま私がセント・ジョージ病院で色盲だという一青年のセラピイを担当していて、何かしら気持ちに引っ掛かりを抱えていたからだろう、ふいとメルツアーに尋ねてみたのだ。どなたか色盲の人の症例をこれ迄お持ちでしたかと。自分がそうだと、彼は返答なされた。ところが私の記憶では、それ以上の会話はプツツと途絶えている。だから彼の色覚異常が本当にはどういふものかを私は知らない。可笑しいことだが、メルツアーは、ハンナの症例を見てくださっていた折り、よく尋ねたものだ。彼女は一人っ娘なのかと。それも一度ならずも、二度も三度も。そしていつも決まって嘆息まじりに、一人っ子というのは辛いものだと言っておっしゃる。どうやらご自分がそうらしい。で私は、内心クスツと笑った。一人っ子なんていいじゃないのって。親の愛情を一身に受けて育ってるふうな彼を、羨ましいこそあれ、お気の毒とはどうしても思えなかったから……。まあ青二才の私とはそうしたものだ。事実そんなことぐらいたった、メルツアーが私に個人的な悲哀を吐露されたように思えるのは……。それ以降ご自分の色覚異常について触れることはなかった。ましてやユダヤ系という血筋(ヘブライ的血脈)にも何ら言及されてはいない。ところが後々、それらの語られなかった事柄が、私の中で妙に気になり始めた。彼が「それを生きた」ということが真実どういふものか、私に

は全くいい程知っちゃいないのだということにふいに<sup>けつまず</sup>蹴躓いた。かくして‘謎解き’が始まった。

メルツアーが己自身の存在の不確実性に懊悩する‘悲傷の魂’であったというのは、私流の直感的把握を超えないわけだが、決して憐憫を意味してはいない。まるでその逆。むしろ羨望を禁じ得ないわけがある。Dr.ピオンを深く知るためには、おそらくギリシャ・ラテン的教養が必須だろうが、Dr.メルツアーに関しては、どうもそれとは趣が違う。しかしながら、あの頃1970年代後半のタヴィストックは Dr. W.ピオンへの猛烈な熱狂的歓呼に沸き立っていて、メルツアーもその煽りを食ったというべきでは決してなからうが、タヴィのリーディング・セミナーなどでは頻りにピオンのグリッドに言及していたものだ。そうした彼の姿に私は心微かに、メラニー・クラインが置いてきぼりを食わされてるみたいに感じられ、妙な反撥というか一抹の悲しさを抱いたのを鮮明に憶えている。だがやがていつしかピオンという牽引力に励起され、俄然メルツアーの認識愛(epistemophilia)に弾みがついたのは確かだ。フロイト・クライン・ピオンというクライン派の流れを総浚いし、それぞれが依拠したところの「心のモデル(Model of the Mind)」を縦横に駆使し、そこに更にメルツアー独自の視座が織り込まれてゆく。彼の心(Mind)のデザインは益々大胆に先鋭的になり、その多次元的形態・意匠に相俟って‘審美的(aesthetic)’心性が加味されてゆく。まさに‘眼の健啖家’としての彼の真骨頂がそこに窺われる。かつてメルツアーは私に語ったものだ。「精神分析」はもはや治療(cure)を超えるべきであると。そこに些か現状への苛立ちが無くもない、だが真に彼は精神分析の未来を夢見ていた。すなわち生の懊悩を超克し「運命愛」へと啓かれてゆく、そうした人格の陶冶がその射程に入っている。メルツアーが心血を注いだ、華々しくも精気溢れかつ錯綜した心(Mind)の見取り図。その基調は圧倒的に‘動的’と言えよう。それでふと私は思ってみる。メルツアー流の心(Mind)の彫琢・研磨において彼自身の拠りどころとなったツールとは、果して彼固有のもの、即ち彼のヘブライ的な‘血’と色覚異常の‘眼’ではなかったかと…。もしも彼の「精神分析的言語」の根幹にそれら二つが紛れもなく、だが‘見えない烙印’として

有るとしたら、それはおそらく‘知る人ぞ知る’何かなのだろうし、私たちがもしも色覚異常ではなく、ましてやヘブライ的血脈でもないとしたら、彼を知ろうとすることに絶望的なハンデ(欠陥)を持っているとは言えまいか。そんなことを、私は大真面目に煩悶しているわけなのだ。もしも本気で彼が見たものを見たように私も見たいと欲するならば、その彼の心眼の‘見え’にこちらも眼を凝らし、そして慣らしてゆくことなのだから、こちらの‘不備’は自覚的に補填する以外に道はない。しかしながら、そんなことをメルツアーご本人が聴かれたならば、戸惑われるかお笑いになるか…。

私は、Dr.D.メルツアーの研究者では決してないし、これからもきっとそうな  
ることはなかろう。彼の著作に総て精通しているわけでも更々ないし、どちら  
と言えればつい先日までメルツアーの思い出には‘記憶喪失’という帳が下りて  
いた。ところが妙な話したが、私の(my dear)メルツアーとは何であったの  
かと問われれば、即座に「元気な男の子！」と私は答えるであろう。そうな  
のだ、その‘元気な男の子’はずうっと私の心の裡で‘石蹴り’に興じていた。  
そして私は、その‘彼’が蹴る石ころがどこへどうころころと転がってゆくのか  
唯々面白がっていた。さてさて、メルツアーという人物の謎解きだが、振り返  
れば、実にこの私の内なる‘元気な男の子’が道案内してくれたような気がする。  
この歳月、無我夢中で遊戯三昧に暮らした。‘眼の人’であるメルツ  
アーに倣って私も又、美術館やら画廊巡りに明け暮れ、私の寓居には蒐  
集した絵画作品が壁に所狭しと飾られてある。やはりというか、色彩よりも  
フォルム(形態)への嗜好性がより強いのは一目瞭然。さらには写真を趣味  
にして以来、私の眼の構えがガラッと豹変した。初めの頃はごく変哲もな  
い、素直一点張りの奇麗な静物写真。それが或る時以来、ひよんなこと  
で眼が弾けた。動くものが撮りたくなった。さらには多重撮影やら合成写真  
などと恐ろしく画面構成に懲り始めた。近頃では例えば原宿界隈に繰り  
出し、ビルの窓硝子(ショーウィンドウ)の外側に映し込まれた風景の断片、  
つまり立ち並ぶ建物、街路樹そして通行人などが窓硝子の内側(店内)と  
交錯して透かし彫りになる、そんなコラージュっぽい写真を撮る。オモシロイ、  
そしてオシャレ。「これって、シュールだあ！」と臆面もなく一人悦に入る。

実に‘シュール(surrealism)’というのがメルツアーその人だと、心密かに私は思ってるのだが、彼の‘眼’にほんのちょっぴり肉薄しつつあるのかも知れない。そうだと至極嬉しいのだが…。さて彼の‘血’の方だが、これが頓と一筋縄ではゆかない。私は或る期間、新宿の「朝日カルチャーセンター」で催された哲学・宗教の公開講座に入り浸っていた。確かにあれやこれやと‘つまみ食い’程度ではあったが、記憶に今尚残るのは「旧約聖書の勘どころ」という講座で、なかなか閃くものがあった。又、銀座の「教文館」で催された「ヘブライ語講座」にも通ってみたことがあり、旧約聖書の原典講読もやってみた。それでメルツアーが少しは判ったのかと尋ねられたら、やはり依然として‘否’であり、謎解きのとばぐちに尚も佇んでいるわけで…。

今となってみれば、それはメルツアーだったのか、己自身の一部なのかもはや判然としないのだが、私の中の‘元気な男の子’は延々と盛んに‘石蹴り’に興じていた。思い出深いものあれこれを挙げれば切りがない。まずは、郷土芸能めぐり。甲府の天津司の舞、信州の霜月祭り、箱根仙石原の湯立獅子舞、それに奥多摩・御岳の薪神楽など。それから徐々に石仏に魅了されてゆく。信州・修那羅峠とその周辺の石仏群めぐり。それに安曇野の道祖神めぐり。それから野田市の「地方史懇話会」の石仏サークルの面々とも印旛沼周辺の村落を散策した。やがて生きもの探訪が始まる。土浦市穴塚での里山自然観察会。これが実に楽しい。さらには「日本野鳥の会」主催のバードウォッチングで、神奈川の双子山やら千葉の三番瀬、そして奥多摩やら高尾やらと実にあちこちよく出掛けた。山も海辺も里山もたくさんの‘生命の物語’に溢れていた。気分は実に爽快で、いつとも知らず愉快的ことに、私が‘昆虫少年’だったり鳥愛好家になっている。そして無類の花好きでもあり、季節ごとに山野草の追っ掛けに興じ、開花期を狙っては箱根芦ノ湖やら御嶽などの「野草園」によく出掛けた。ベランダにもたくさんの鉢植えが並んでいる。睡蓮の水鉢にはメダカが産卵して、孵化した稚魚たちがウジャウジャ泳ぎ回っている。そして今や私は、仰山なメダカさんやら雨蛙さんなどと一緒に賑やかに‘家族’して暮らしているわけで…。それでメルツアーの謎解きはどうなったのかと訊かれたら、あら

まっ、忘れてた！というのが正直なところなのだ。しかしながら、ふいと一つ判ったことがある。ほんの少し‘私’が見えてきた。おしまいには「私が在る、今ここに生きている」というしみじみとした感覚が蘇った。かつて「私はどこに在るのか？！」と心に纏わりつくようにあった内なる不安・怯懦が幾許か拭い去られている。来し方を顧みて、はたと私は思い至る。嗚呼、そうだ。あのメルツアーならぬ、私の中の石蹴りをする男の子とは畢竟一つの‘聲’なのだ。「生きよ！一つの運命として生きてみよ！」と、私はそんなふうに絶えず語り掛けてもらっていたのだと……。メルツアーの訃報に接した今尚も、その私の内なる聲は凜凜とこだまして止まない。

いまだ私の運命とは何かは不明だが、紛れもなく彼の地でメルツアーに限らずとも、実に多くの懐かしい人たちと互いに‘生命の物語’<sup>いのち</sup>を紡ぎ合ったという感慨に浸る。あの当時のタヴィではよく仲間内で‘タヴィストック・ファミリー’という呼称を使うことがあった。Mrs.ハリスを初めとして、私が親しく指導を仰いだ方々はどなたもナイーブで、恬淡<sup>つよ</sup>としていながら芯の韌さをお持ちで、実に美しく、いずれもが等しくどことなく眼には見えない‘印’を額に刻まれているような趣があった。記念写真など一枚として手元に残ってはいないのだが、私の心のアルバムに居並ぶ彼ら一人一人の面影はついで色褪せることはない。そして今や私の後を継いで、日本の若き世代がタヴィストック・ファミリーに続々と参入していると伺う。何と嬉しいことか！そして帰国された彼らに出逢う折りには、つい心躍らせ、かつて見知ったタヴィの‘刻印’を彼らの額に見つけようとしてしまう。まるで幼かりし頃の故郷の懐かしい駐車場の匂いを嗅ぐかのように……。彼らはいずれも、戦後日本の疲弊と窮乏を親の世代と分かち合いながら生き凌いだ我々の世代とは自ずから違う、経済復興を遂げし日本が産んだ、まっすぐに澆漓とした、健やかな若き世代である。そうした眩しいような優秀な頭脳が結集されて、それらの手から手へと担われて、今ようやくにしてメルツアーは日本へと運ばれる。

かねがね私は日本語で精神分析するということは一つの興奮だと思ってきた。「精神分析」がいかなる趨勢にあらうとも、その未来とは偏に、担い

手となる我々一人一人が‘悲傷の魂’に生命<sup>いのち</sup>の物語を紡ぐ場を敢然として  
て請け合うことにこそ懸かっている。ここに至って我々は此の地日本に、  
礎<sup>いしづえ</sup>とも標<sup>しるべ</sup>ともなるべき‘親石’としてメルツアーを迎えたということになるのだ  
ろうか。彼が恩寵であろうことは疑いなしとして、だがおそらくは我々にとって  
試練にもなろうかと思われる。いずれにしても、彼メルツアーが‘親石’なら  
ば、私もまたその傍らに‘隅の石’の一つとしてありたいものと願う。

なつかしきDr.メルツアー逝かれて一周忌に

2005年8月13日

※ 出典：S・F・キャセツセ著「入門 メルツアーの精神分析論考」

訳：木部則雄/脇谷順子 解題・訳：山上千鶴子

岩崎学術出版社 2005

注)「ハンナの症例」の詳細については、  
〈精神分析の現在〉(現代のエスプリ 至文堂 1995)の  
「メルツアーの児童分析理論の精髓」を参照のこと。